



守 護 姫

まもりひめ

淫神復活の宴

小説 新居佑
挿絵 さんば挿

第一章	護国の戦巫女	006
第二章	邪なる者たち	031
第三章	淫虐のくのいち	049
第四章	真白肛虐絶頂	073
第五章	催淫暗示	085
第六章	守護姫乱姦通	121
第七章	人妻拳士囚わる	179
第八章	強く儂い者たち	228

登場人物紹介

Characters



あいか
愛華

帝を守る守護姫の筆頭。長大な薙刀を武器とする。心優しく生真面目な人柄。

ことは
琴葉

忍びの一族でありながらその実力と忠誠心から守護姫になる。無口で無表情。

ましろ
真白

宮中の諸事を引き受ける宮司の娘。守護姫の一人。霊媒の力に秀でている。

ききょう
桔梗

愛華の母親。かつて守護姫として活躍したが、今は一線を退いている。

「あ、愛……華……っ」

力ない言葉を残して、ガクツと膝から崩れ落ちる若き帝の姿に、愛華の鼓動が跳ね上がる。

「ひよほほ……なかなかおもしろい寸劇でおじやったなあ」

「……っ！ 金岡……なぜ生きて……?! 帝さまをどうしたのですっっ?!」

ぐったりと倒れた少年と、その横に金岡——確かに先ほど討ち果たした男が、前と変わらぬ姿で立っており、醜悪な笑みを浮かべていた。

「このしゃくは、相手の力を奪うことができるでおじやる。鬼蜘蛛たちや、まろの身体の強化。それもすべて元は別の妖魔から奪ったもの。然るに、先ほどのまろが生き延びた理由は——」

「琴葉の忍びの力……っっ！」

「そうでおじやる！ 一度はまろを追い詰めた力が、まろの命を救うとは……皮肉なものでおじやるなあ。そして童をどうしたかというとなあっっ！」

金岡がふいと向けたしゃくの先から、ビュルルツツ！ と触手——今度は闇に染まった黒色の一群が現れ、愛華目掛けて殺到した。

愛華も瞬時に聖気を最大解放し、自身を強大な靈力の闘気で包み込んだ。薙刀をザツと構え、襲い来る暗黒の触手たちを迎撃する。

「その手は食わないと言ったはずですっつ！ 今度こそ影も残さず滅しますっつ！ はああああ……なっ、なんなのっつ!!」

魔を斬り、消滅させてきた白き鬨気を纏った刃が、闇の触手に触れた瞬間、息を吹きかけられた蠟燭の灯りのように、フツと簡単に掻き消えてしまった。

愛華自身を包み込む聖気も同様で、触手たちの攻撃を阻むどころか、ほとんど無抵抗に失われていく。髪や瞳の色も元に戻り、全身から力が抜けていく感覚だ。

「し、しま……っ！ きゃっ、きゃあああああっつ！」

攻守の要をなくした守護姫は、数で勝る触手たちの攻撃をかわしきれずに、ギギユギユツツと、近くの木々に縛り付けられてしまう。

「ふふ、予想どおりじゃ。この小童は邪神さまを封じるほどの聖気を内に宿しておる。お主たち守護姫の攻撃的な退魔能力とは、ある意味正反対じゃ。ならばその封印能力だけ奪い、属性を闇にすれば……ほれ、簡単に王手でおじゃる。ひよほほほっつ」

「金、岡っあああああっつ!! く、うううっつ」

仲間の守護姫だけでなく、幼き帝の力まで悪事に利用する金岡に、刃のような怒りが湧いた。けれど触手によってギチギチに締め付けられた女体では、攻勢に転ずることは難しい。

「さあて、封印の箱も手に入ったことじゃし、鍵も二つ転がっておる。邪神さま復

活にあと必要なのは、そう——お主だけじゃなあ、愛華っつ！」

ギギユウウツツ！ と黒色の触手が男の意志に合わせて、拘束された愛華の身体を更
にきつく縛り上げる。

「こ、この……きやああああっつ!!」

脂の乗った媚肉に食い込む触手の痛みに、透き通った悲鳴が上がる。

近くにあつた太幹にもたれかかると拘束される。両手は腰のすぐ横の位置に置かれ、
もたれかかった枝を上から握るように強要される。

吊り上げられた格好でなお存在感を示す太腿は、左右の幹に縛られた足首に引つ張られ
て、大きくハの字型に開脚される。ふわりと広がった袴が脚の付け根まで押し上げられ、
隠れていたぶりんとしたお尻と、情熱を滾らせる淫猥な下着を穿いた女の秘園が、憎い
相手の前に晒される。

まるで男に責められるのを待ちわびているかのような羞恥を誘う格好に、少女は悔しさを
露にしたきつい瞳で、金岡を睨みつけた。

「ぐふふ、イイ眺めじゃ。育つところは育ち、締まるところは締まっておる。まろは前か
ら守護姫の中で愛華、お主が一番気に入ったのじゃ。ふふ、どれどれ……」

「つつ、やめて……触らないでつつ！ そこは……つつ。いやっ！ く、うううつつ」

愛華の拒絶の意志を無視して、容量を超えた脂肪に包まれた丸っこい、それでいてジト

ジトした汗をはらんだ十本の指が、縛られた愛華の地面に向かって突き出た乳脂肪へと向かう。

いやらしい両の掌は、少女の雰囲気にあつた柔らかい衣装で包んだ胸元を、まずは巫女服を着せたまま、根元からじっくりと味わっていく。

ずつしりと確かな重量感を感じさせる美乳を掌でタプタプさせながら味わうと、今度はその丸みを帯びたふくよかな形で満足するために、胸の横の広がりに沿ってゆつくりと先端に向かって細くなっていく丸い円を堪能する。

「おおつ、形も重さもたまらんのうつ。後は……ふふ、色と固さ……それに感度じゃ。乳首はどうかのう？ シコシコされるのがいいのか？ チュウチュウされた方がいいか!? ひよほほほつ、我慢ならんでおじやるうつつ!」

普段から好色そうな顔つきの男が、更にいやらしい表情を浮かべた。愛華に巻きついた触手を操り服を破ると、勢いよく胸元をはだけさせる。

「こ、これは……愛華、お主……乳が丸出しではないか!? ほほほつ、どうしたのじや？ 守護姫ともあろうものが、こんなはしたない姿でよいのかのう?」

金岡の言うとおり、愛華のはだけた乳房は、一切の下着やサラシを身に着けておらず、健康的な桃色の肌とズツチリした乳脂肪を丸々と晒している。

「くくくつつ! ううつ、み、見ないでつつ! 見ては……だめえつつ!」

隠していた秘密を、よりによって金岡に見られた少女は、恥ずかしそうに顔を赤らめ、男に非難の声を送る。

けれど愛華が叫ぶ乙女のような拒絶が、先ほどまでの鬼神のごとく凜とした守護姫との温度差と相まって、逆に男を興奮させる結果となってしまう。

「によほほっ、これは驚いたでおじゃる。一騎当千、無双無敵の愛華が乳を見せるのが好きな露出狂女じゃったとは。市中の者が知ったら、どうなるか……ぐふふ」

「ち、違いますっ！ これは神霊の力をより密接に受け入れるため……覚醒した聖気を抑えるために仕方なく……あなたなんかに見られて……ううっ」

少年はおろか琴葉たちにも黙ってきた秘密の暴露に、眉をひそめて今にも泣き出しそうな思いだった。

愛華とて年頃の娘だ。いくら職務のためとはいえ、ただでさえ目立つ巨乳を、いつはだけるかもわからない服の下に、一年中無防備なまま抱えておくのは恥ずかしすぎる。人がたくさん集まる場所などは、意識的に腕を胸の前にあてがってしまいうくらいだ。

「乙女の恥ずかしさからか？ かわいいのう。せめてアソコの下着だけはこのうのが、またかわいいでおじゃる。このまま二人のように性奴隷へ墮とすのはもったいないのう……どうじゃ愛華、まろの花嫁にならんかのう？ 邪神さま復活のおりには、まろは都の支配者じゃ。悪い話ではない、むしろ最良の縁組じゃろう？」

金岡は名案とばかり、しゃくを片手にほくそ笑む。

けれど抵抗の末の敗北どころか、自らの意志で仲間を見捨て、男と同じように裏切り者になるなど、愛華の誇りが許すはずもない。

「ふ、ふざけないでっつ！ こんな醜態を晒しましたが、あなたは帝さまの……守護姫の敵ですっつ！ 自分の身惜しさに、魔に屈するなど……私は絶対にあなたの思い通りにはなりませんっつ!!」

愛華は、いつもの凜とした気丈な表情を取り戻し、眼下の派手な貴族に向けて、自らの揺るぎない信念を言い放つ。

「ぬぶううううっつ！ い、言わせておけばでおじゃるっ！ せっかくまろがよく計らってやろうというのに、とんだ牝犬じゃのっ！ 絶対に思い通りにならぬと言ったな？ むふふ、その言葉……守れるものなら守ってみるでおじゃるうっ！」

少女の言葉に激昂した金岡は、頬を蛙のように膨らませると、前方の空間から新たな触手を五本出現させる。

五本のうち三本は先端に鋭い針を一つ持ち、針の先からトロトロとした不気味な液体を垂れ流している。

残りの二本は、先ほどの針を持たない代わりに掌大の吸盤を備えており、妖しい分泌液を滲ませながら開いたり閉じたりする姿は、さながら獲物を狙う食虫植物のようだ。

それらが男の号令で一斉に、身動きの取れない愛華へと殺到する。

「ああつっ！ ううつ、く、ううう！」

ブチュウツッ！ チュブブツッ！

邪な意志に操られた淫撃が、愛華のあられもない乳首、そして下着越しの淫核を狙い打つ。寸分の狂いもなく差し込まれた三本の針先から、粘液がそれぞれ女の肉豆へと一滴も余すことなく注入される。

吸盤を持った二本の触手は、大蛇のような滑らかな動きでグルリと愛華の背後に回った。そして少女の頭の左右から速度を上げて飛び込むと、先につけた吸盤をちようどこめかみの辺りに、ピチュウツという嫌な音とともに吸い付けてしまう。

「く、ううう……な、なにをするつもりです!! 私たち守護姫に普通の毒など効かないことは、あなたが一番知っている……! う、んんっ……はず、はあはあ……でしよ
う? う、あああつ」

(こ、こんな辱めくらいで……私は帝さまを必ず守つてみせるっつ!)

乳頭とクリトリスを辱められた悔しさと羞恥で心が揺れるが、それ以上に強い使命感がズキズキするような痛みや動揺を弾き飛ばす。

「くくく、哀れな娘じゃの。一度まるの誘いを断つた女に、誇りもなにもないでおじやるよ。お主はこれからまるのいいなり、操り肉人形にされるでおじやる」

「なっ、操り……っ!! ふざけないでっ! 私の心は私と私の仲間、そして帝さまだけのもの! あなたの人形なんかには死んでもなりませんっ!」

男の言葉に驚愕する。女の肉体を嬲り者にするだけでは飽き足らず、心すらも犯し抜こうとするとは、外道の極みだ。

幼い頃から守護姫を目指して過酷な修練を積んできた。身体だけでなく心まで墮ちてしまふほどヤワではない。ましてや男たちを悦ばせるだけの肉人形など、絶対に認めるわけにはいかなかった。

「その強気な口調を甘くおねだりさせるのが楽しみじゃ。さぞ淫らな声で悶えるのじゃろうなあ、ぬっふっふ。我が操心術の力、とくと味わうがいいでおじゃるっ!」

「耐えてみせますっ! 必ず、どんなことがあるうともっ!」

愛華の強気な発言を打ち消すかのように、しゃくが闇の波動を発し、愛華の頭に吸着した触手がドクドクと不気味な脈を打ち始める。そして――。

「なっ、くあうっ!! んああっ!」

（あ、熱いっ!! さっきの液体のせい!! でも、これは……この感覚は!! んひいっ!）

ビリリッ! ビビイッ!

こめかみに吸着した触手から、まばゆいばかりの電撃が愛華の頭に叩き込まれた。自分

のものとは思えない内なる牝の叫びを必死の想いで抑えこむが、まるでできない。

身体を走る電気信号がすべて快感に変わってしまったかのような、たまらない感覚に見舞われる。

知らぬ間に全身から大量の汗が噴出し、着ている巫女服がベットリと濡れている。まるで熱病にでもかかったみたい息が荒くなり、顔がどんどん紅潮していく。

触手によって無理やり左右に開かれた太腿がビクビクと物欲しそうに痙攣し、ゾクゾクする衝動が下半身から迸る。薄い桃色だった両乳首は、火鉢に放り込まれたみたいに赤く熱くなっている。

(く、ううっ……はあっはあっ！)

健康的な豊満ボディを、確かな性的快感が駆け抜ける。年頃の肉体が本能に突き動かされるままに跳ね上がって、あまりの気持ちよさに地面に突っ伏して悶絶するのではとさえ思わせる。

「効いてきたでおじゃるな。さあ、どうじゃ愛華。気持ちイイでおじゃろう？ 熱くて熱くて蕩けそうでおじゃろう？」

「だ、誰が……そんな……は、はいっ！ き、気持ちイイですうっ！ あ、愛華はああっ、気持ちよすぎて蕩けてしまいますうっ！ な、なにっ!? な、なんですか……んくうっ！」



「ああそうだよな。守護姫さまたちが負けたって話はこれまで聞いたことがないしな。帝さま直属だったのに、俺たち平民のことも気にかけてくださる。三人揃って素晴らしいお方たちだぜ……って、なんだおい。街の広場が騒がしいぜ」

男たちは会話を中断し、大勢の人だかりができている広場の方へと足を向けた。

「な……なんだこいつは……っっ!!」

「う、うそだろ……!!? こんな嘘だよなあ、おいっっっ!!」

事態を認識した男たちが絶句し、掌から酒瓶が滑り落ちて粉々に砕け散る。男たちが受けた衝撃は、周りに立ち尽くしている多くの民たちが同様に思い浮かべていることでもあった。

「くっ……はあ、あうっ」

琴葉は全身を容赦なく駆け抜ける快楽の波動に思う存分いたぶられ侵食され、若々しい身体を……そして誇り高い精神すらも融解させられていた。

（おかしい……熱いのが……収まらな、いつ）

常に民の平和と帝の安泰を考えていた理知的な脳裏は、甘ったるくて激しい牝の欲情で満たされきっていた。

先日、妖魔へと堕ちた金岡の強烈な快樂波動を豊満な身体に受け、恥辱絶頂の末に敗北した琴葉。

数日後、背の高い馬に無理やり跨がらせられたくのいちは、日もまだ高い宮中の大通りのど真ん中で、恥辱の見せしめ刑に処せられていた。

「むふう、たまらぬであろう？ まろの快樂波動が染み渡っておるのじゃ。欲しくて欲しくて、身体が疼いて……まろを倒すところではないでおじやるのう」

琴葉が跨がっている馬の横では、豪勢な牛車に乗った金岡が、自慢のしゃくを口に当てながら、粘着質な視線を捕らわれの守護姫に送っていた。

守護姫が内に秘める聖なる退魔力に反応して、一定時間ごとに快感と情欲を爆発的に膨れ上がらせる——まさに女である戦姫たちの天敵というべき邪悪な快樂波動は、今も琴葉を含めた三人の少女たちを苦しめ続けている。

（く、くせになりそう……あつ、ふうあつ）

男の目論見どおり淫らに変わっていく女体に、琴葉の理性が翻弄される。淫らな活火山がボコボコと噴火する度に、計り知れない牝の欲求が魅惑的な肢体を蝕んでいく。

しかも馬の上で強制された格好は、ただでさえ露出の高かった紫の忍び装束を、更に淫らな方向へと舵をきったような、とてつもなくいやらしいものだった。

タイトな紫紺の忍び装束は取り払われ、代わりに網目の細かい鎖帷子を模した衣服を着

せられている。

隠すものがなくなり露になった豊かな巨乳や淫毛が生い茂った股間、快樂に茹だった桃色の肌は、裸を見せつける以上のいやらしさだ。

「んんっっ、むううっ」

口には牝に言葉など不要とばかりに特性の猿轡がはめられており、涎の雫がタラタラと細顎を垂れ落ちる

しかも引き締まった女体のいやらしさを強調するように、ヌメつく触手を蠢かせた、まるで蛸のような化け物が、琴葉の媚体に張り付いている。

これは女の濃い愛蜜を餌とする寄生妖魔で、テカテカと光る触手には、吸盤の代わりにざらついた突起がピッシリと生え揃っており、少女の肌をウネウネと不気味に這うだけで、たまらない甘美感が全身を突き抜けてしまう凶悪なものだ。

胸を根元から締め付けられ、お尻や臍、脇の下にいたるまで、様々な性感帯にベトベトの粘液を塗りたくられている。

「っっっ！　くくくっっ！」

しかも本体が張り付いている場所は琴葉の熟した股間部であり、生え出た一際固く巨大な肉突起は、容赦なく媚肉の最奥に突き込まれている。

突き込むだけでなく、自らヴヴヴッ！と強烈に震えたりしながら女を苛む肉突起は、

邪な意志を持っている魔淫具であり、ただでさえ快樂波動の影響でグシヨ濡れになっている秘肉のワレメを、グリグリッと情け容赦なく責め抜いていた。

「……んんんっつ！ ひ、ひいぐっつ……ふおおっつ！」

火鉢にでも放り込まれているみたいに身体中が熱くて、ネットリしたいやらしい汗が噴き出して止まらない。

表情の起伏に乏しかったクールな美貌は、耐え難い淫らな疼きに悶絶している。整った眉は力なく垂れ、きつく閉じることさえかなわない半開きの唇からは、男を誘うような艶っぽい嬌声と、トロリとした涎が惨めなまでに垂れ流されている。

(く、悔しい……ううっつ)

感情を面に出さない琴葉だが、現在与えられている屈辱に、きつく唇を噛み締めていた。金岡の恫喝で無理やり集められたのだろう。大通りの端から端まで集まったたくさんの人々は、文字通り見せしめの恥辱刑に処せられた守護姫の一人を見つめ、皆一様に驚きや悲嘆の表情を浮かべている。

(す、すまない……みんな……っつ)

帝は当然のことだが、ひいては国に住む民たちの平穏を守るのが、守護姫に課せられた使命だったはずだ。

人々の沈んだ顔を見て、使命を果たせなかったという強い自責の念が琴葉を苦しめる。

けれど彼女はただ連れてこられたわけではない。

いまだ民衆の中でくすぶる守護姫への淡い希望を、妖魔たちが支配する深い絶望へと変えるため。そして全妖魔が待ち望む、封印された邪神復活の条件である守護姫たちの性奴隷化を決定的なものにするだ。

「す、すごい格好だな……」

「妖魔たちもあんなひでえことしやがって……っ。でも、ああ……くそ、色っぽいなあ」
ズブチユズルチュツ！ と隠すことなく響き渡る牝の水音に惹かれるように、民衆たちの視線が淫らに責め罵られているのいちへと向けられて離れない。

正義の護り女である彼女たちを淫らな感情で見えてはいけないとわかっている、恥ずかしくない姿で琴葉が振りまく淫靡な牝フェロモンは、男たちの牝の感覚を刺激する。

(み、見ないで……恥ずかし……っ。どうして見られて気持ち、よく……っ！)

初めのうちは敗れた自身への不甲斐なさと、妖魔に支配されてなお守護姫である自分に期待してくれている民衆たちに報いたい、そういう気持ちが勝っていた。いかな辱めにも耐え抜いて、必ず平和な世の中を取り戻してみせる。そう思っただけ揺るがなかった。

「ふむうんっつ！ ん、んんっつ!!」

馬が道端の段差につまずいて、グンツと大きく上下に揺れた。女芯を貫いている擬似巨根は衝撃をもろに受けて、魅惑のくのいちの過敏すぎる子宮口を思い切り打ち叩く。

(き、効くっつ！ は……果てる、私……果てっつ!!)

きつく締め付けられた猿轡の隙間から、惱ましい牝の咆哮がこだまする。

真つ赤に充血した陰唇の奥からプシュウツツ！ と勢いよく熱い悦楽の噴流が飛沫を上げ、跨がった琴葉の両太腿を恥辱の女蜜が垂れ落ちる。

「ひいつ、ぐうううううっつ！」

ネチャつく触手によつてギチギチに拘束されている肢体が、それを引き剥がすかのような勢いでギユンツツ！ と反り返り、強制的に突き出された柔らかな美乳が余韻を残すように、タプンタプンと淫靡に揺れる。

「な、なあ……今の……」

「ああ……もしかして琴葉さま……いつちまつたのか……？ 俺たちの目の前で!？」

男たちの言葉に、絶頂の余韻に浸る琴葉の顔が限界まで赤くなる。

守るべき対象に浴びせられるいやらしい真実に、掲げてきた誇りが汚され、鍛えてきた肉体は、更なる淫欲を求めて、全身に甘い痺れを走らせた。

(い、言わないで……っつ。イクなんてそんな……っつ)

衆人環視の羞恥から逃れようと必死に腰を動かしても、逆に民たちに恥ずかしい姿を晒してしまうだけだ。

寄生している妖魔も、ムッチリと張り詰めた少女の快感の昂りに反応して、自動的に締

め付けを強め、また新たな触手を生み出して、正義のくのいちを徹底的に快楽の園へと陥落させようと苛め抜く。

ギチュツツ！ ギュルルツツ！

「つつつつつ!! おっおっ、くくつつつ!!」

(よ、妖魔に犯されているのに……なんでもまた果て……つつつつ!!)

野太い悦楽の叫びとともに、猿轡の隙間からゴポポツ！ と粘着質な涎が零れ落ちてくる。

肥大化した両乳首と剥けたガチガチのクリトリスを締め付け弄る悦楽の愛撫に、短い銀髪が激しく揺れる。

ただでさえ敏感な部分なのに、そこを毛ばだった触手突起でグシユグシユと、徹底的に擦られる。しかも存在感抜群のタップツとした乳房の先端、真っ赤に起立した二つの乳首も連動してこそぎとられ、快感は二倍三倍に膨れ上がる。

両乳と股間のそれぞれの肉豆で爆発する快楽の電流が、互いに連動し弾けあって、琴葉の理性に破壊的な肉衝動を刻み込む。

比較的整備された大通りとはいえ、石ころや陥没した部分はたくさんある。馬の歩みは金岡の指示どおりに道の凹凸などまるで無視して、一番人目につく道のだ真ん中を悠然と歩いている。

(果て……るううっ!! と、とめ……歩くの……おおっつ!)

クリトリスに両乳首という、膣に次ぐ第二第三の性感帯をうねる触手に際限なく刺激されて、捕らわれのくのいちの脳内を、白い瞬きが連続して弾け飛ぶ。

柔軟性に富んだ背筋は、限界まできつく反り返っている。キュツとしぼれたウエスト回りを中心に、上も下もピクンッピクンッと間をおいて大きく痙攣し、琴葉が屈辱の連続絶頂に突入したことを如実に示す。

妖魔が張り付いた陰部からは、ブシュブシュツととめどない蜜液が溢れ出し、それを妖魔に栄養として吸われている感覚が、静かなる暗殺者にたまらないマゾ感覚を植えつける。「んむふうっつ! むうっ、あつ、あつ、あ、あああつつ!」

適度に脂の乗った腹筋が惱ましく躍り、たっぷりの乳脂肪が上下に揺れる度に、新たな絶頂電流が、三つの女豆から発せられ、苦悶のくのいちを更なる悶絶へと導いていく。

すでに声を抑えることなどできるはずもなく、妖魔に弄ばれるままにムチムチと艶がかった女体が、人々の前でビクビクと震えまくる。

「ひでえな……俺たちの守護姫さまをこんな目にあわせやがって……っつ」

「い、いや。でも……あれ、琴葉さま……自分で腰振ってヨガってないか? もしかして無理やりじゃなくて、自分が好きでやってるんじゃない?」

周囲から聞こえてくる男たちの言動に、涙が溢れるほど悔しく情けなかった。彼らを荒

んだ気持ちにさせてしまったのは、自分の力が足りなかったせいだ。

(い、言わないで……く、うつつ)

男たちに卑猥な言葉で揶揄されると、背筋にゾクゾクしたなんともいえない新しい快楽が巻き起こる。守り通してきた頑な矜持があっさり融解してしまいそうな熱い爆発が、ビチョビチョに湿った股間で何度も弾けた。

「つつ、んつつ！」

声にならない嬌声とともに、猿轡の隙間から涎が流れ飛び散る情けない自分を意識すると、たまらない快楽が脳髓を痺れさせる。

民衆たちの淫靡な願いに応えるかのように、理性の枷を振り切った牝本能が、緊縛された肉体に恥辱極まりない行為を命令する。

ズチュツツ！ ズチュチュツツ！ ヌチユアアツツ！

野生の情欲をくすぐる淫らな蜜音が、人だかりのできた大通りに響く。

興奮した牝欲に操られた琴葉の妖艶な腰がグンツと下がり、民衆の眼前でグイグイといやらしすぎる円を描く。

固い鞍と柔らかい膣口の間でより密着度を増した魔物のイボ剛直が、ズズンツと子宮口まで届き、琴葉の理性を白くて甘い禁断の悦楽で染め抜いていく。

(いやらしい目で見られるの、た……たまらないっつ!!)



ムチリとした太腿をビクビクいわせながら、いまや馬の身体にガッチリとしがみ付いた下半身が、大きく前後左右に振りたくられる。まるで自ら快楽を貪る恥女のような行為は、最高の退魔師の証である守護姫のものとは思えないほどに官能的な臭いを放っていた。

民衆たちの視線を意識するだけで、一段も二段も高い快感がジクジクの淫裂で暴発する。裏切りと背徳にまみれたゾクゾクした悦楽に、美しいくのいちが呑み込まれていく。

「見間違いじゃねえ。ほ、ほんとに自分で腰振って感じてやがる……っつ。誇り高い守護姫が敵に捕まったからって、こんなこと……っ」

「これが本性だったんじゃないかねえのか？ はっ、真面目に信じてきたのが馬鹿らしく思えてきたぜ」

敬い信頼してきた美戦士の実態に、民衆たちの中で邪な感情が蔓延はびこっていく。それは同時に金岡が施したある仕掛けの発動条件でもあった。

ヴヴヴヴツツツ！ ヴヴァヴァヴァアアアツツ！

(っつっつっ!! は、激しっつっ！ ま、た……果てるっつ!!)

一瞬、琴葉の惱ましい肢体がギョーン！ と強張った。そしてわずかの後、これまでに上の痙攣がきつい網目模様の豊熟した身体を弾けさせる。

ブシューアアツツ！ と腔のワレメから湯気を纏った濃厚な愛蜜が、まるで噴水のように噴き出てくる。全身の汗腺がブワツと開き、牝の臭いの染み付いた汗が、民衆に少女の快

楽の深さを認識させる。

「くく、やっと本領発揮でおじゃるか。聞いておるか、琴葉よ？ その妖魔はまろが念を込めた特性での。ほれ、お主に興奮しておる男どもの劣情を感じて、そいつの性欲も際限なく上がっていくのよ。気持ちよいか？ ほほ、気持ちよいに決まっておるよのう。ほっほっほ」

(た……民たちの心……!? ひ、卑劣な……ああつ、は……果て……っつ!!)

告げられた事実には反論しなかったが、猿轡の間からは発情した獣の声しか聞こえない。

どんなに卑劣な罠であつても、それを憎む心があつても、一度火のついた感じ盛りの肉体にはまったく関係なかった。

百をゆうに超える男たちの邪な心を感じ取った魔淫具は、琴葉が経験した鬼蜘蛛の舌責めなど児童にしか思えない破滅的な快感を、穢れなき理性に強いてくる。

「んんっつ、んぐっつ！ ひううっつ！」

もはや自ら腰を振るどころの状態を通り抜けて、渦巻く快樂の虜へと転がり落ちるうら若きくのいち。

グッチョリと濡れた膺の中で、前後左右に有り得ないタイミングで動き回る魔淫具のもたらす淫らな衝動は、琴葉から気高き誇りを剥ぎ取って、ただ快感に狂う牝犬へと変貌させる。

「ふおおおおうっつ！ ひぎつつ……むほおおおおおつつ!!」

ビブチウウウツツッ！ ビシユツツッ！ ジュバアアツツ！

途切れない連続絶頂に湯気すら帯びた熱い牝の本気汁が、民衆の眼前で勢いよく放たれる。

平坦だった喘ぎ声が明確な快楽の色を滲ませて、無口なくのいちから必死さのこもった艶のある嬌声を吐き出させる。

肉厚の両脚が突つ張り、背筋がこれでもかと仰け反り天を向く。ピンツと勃つた乳首と肉豆は、まだ虐め足りないとばかりに赤々と充血し、たまらない魔悦の痺れを意識朦朧の女闘士に送り続けている。

「んふうううつつ！ おあつ、ひぎいいいんつつ！」

あまりの激しいイキっぷりに馬の腹に縛り付けてあつた両脚の縛めを引きちぎり、琴葉は地面へと投げ出され、同時に猿轡も解けてしまう。

「お、おはああつ……み、見ないでえええつつ！ こんな、おおおつつ!!」

後ろ手に拘束されたまま這いつくばる姿は、まるで芋虫のようだった。引き締まったお尻を高々と掲げ、媚肉の詰まった乳房を自身の体重で地面に思い切り擦り付けて喘ぐ。

全身を艶やかに彩る鋼線と、醜い蛸妖魔にいいように弄ばれてグチヨグチヨ汁まみれの鍛え抜かれた肢体は、たまらなくエロティックだ。

「あ、ああああつっ！ イグウツ！ まだ、イクツツ！ ア、アソコ妖魔にズコズコされて……いいひいいつつ!!」

口数の少ないのいちが恥も外聞もなく悦楽の咆哮を叫び続ける。

全身に涎と汗、それにネットリとした濃い蜜汁と妖魔の体液を塗りたくってビクつく姿は、守護姫と呼ばれ都の誇りだったくのいちが、どうしようもない敗北を喫したのだという事実を如実に、民衆たちに突きつける。

「ほ、本当に負けちまったんだ……こ、琴葉さま……」

「しかもこんな売女みたいなの……ん？ なんだよ、あのケツ……なんか札みたいなの……ま、まさか……つつ!!」

すでに守護姫としての貫禄などあったものではない、汗と汁まみれの媚体の一部、グンツとはしたなく突き出された尻の穴に、皆の視線が釘付けになる。さつきまで細身だったお腹もどこかしら初期の妊婦のように膨らんできているような感じだ。

「ふお……くおおおおおつ！ そ、そこ……ああつっ、んほおあああああつっ!」

なにか訴えたげな琴葉の身体が思い切り痙攣する。お尻に貼ってある梵字のようなものが書かれた呪符、その上からお尻の穴に向けて金岡が、右手の人差し指から薬指までの三本を思い切り突き込んだのだ。

「……おおおおつ！ イ、グッ！ ……お、お尻でイグイグウツ!」

第八章 強く儂い者たち

邪神復活の報は瞬く間に都中に届き、かつて人々が繁栄を謳歌していた市中は、いまや妖魔たちの手によって完全に占拠されつつあった。

人々は皆、人間らしい生活を奪われ、今はただ荒ぶる妖魔たちに家畜のように扱われる日々が、目の前まで迫ってきている。

しかしそれは、まだほんの始まりに過ぎなかった。

「はあはあ……あつ、おおおつ！ く、ふううんつ」

まるで盛りのついた犬猫のような熱い吐息を漏らしているのは守護姫・愛華、琴葉、真白、そして桔梗——かつて人々の記憶にあつた彼女たちの凛とした瞳は虚ろで、眉は切なそうに皺を寄せている。

物欲しそうな半開きの口からは、犬のように情けなく垂れた舌が出ずっぱりになっていて、輝かしい守護姫としての面影など微塵も感じられない。

しかもその腹は、全員が丸々と膨れたポテ腹で、恥辱の妊娠快楽にネットリとした牝汁に濡れた内股が、さつきからビクビクと震え続けていた。

愛華たちが立っているのは、つい先日まで宮中と呼ばれていた神聖な場所だ。今は妖魔

たちに支配され、美しかった外観は禍々しく、内部は濃い妖気に包まれている。

彼女たちを見下ろすように、邪悪な妖魔の衣服に身を包んだ玉門天が、かつて帝と呼ばれた少年のものだった玉座に座っており、頼杖をついたまま、目の前の麗しき妊婦たちと、彼女たちを取り囲む劣情に満ちた民草たちを、冷たい眼差しで見つめていた。

そして宴は始められた――。

『ほおおおおつっ、く、くふうつっ』

愛華たちは揃って、量感を増して張り詰めた淫乱ヒップの中央に両手をあてがい、恥じることなく濡れそぼった牝の唇をギチチィッ！ と左右に押し広げてみせた。

「お、おほおおうんっつ！ い、入れてくださいっ……あなたたちのお、くっさい牡チンポをおっ！ 愛華のドロドロマンコに……思う存分ぶち込んでくださいいいんっつ!!」

切なげに揺れる瞳には、すでに守護姫としての気丈さは失われており、ただただ性欲に對する貪欲なまでの牝本能で支配されている。

「げへへ、それじゃあお言葉に甘えて存分に味わさせてもらうぜえっ！」

愛華たちを囲んでいる数十人にも及ぶ男たちは皆、洗脳された愛華を犯し尽くした貴族たちのように、妖魔に魂を売り渡してしまった者たちだ。

彼らも初めの頃は、守護姫さえいれば、妖魔など恐れるに足らないと本気で思っていた。しかしそんな希望は本当に儂いものだったのだと痛切に思い知らされ……堕ちた牝を犯す側に回ったのだ。

痛烈な悲壮感に打ちひしがれた彼らにとって、守護姫は敬う存在ではなく、どうにもならない捌け口をぶちまける、文字通りの肉便器でしかない。

そしてそんな性欲に支配されているのは、堕ちた美闘士たちも同じことだ。

「民たちのチンポが、愛華の妊娠子宮にぶち当たってます!! 敏感すぎてイキまくります……イグウウツ!!!」

初めての妊娠で母性が揺らいでいるのだろう。愛華は膨らんだボテ腹を優しく抱き抱えるようにしながら、股間と胸ではひっきりなしに母乳と潮を吹き飛ばしている。

「ふ、太い……っ。おおっ、イクウツ!!」

「ああんっっ! イ、イイですわあっ! もうどうにでもしてくださいまし……わ、わたくし頭が変になっちゃってます——っっ!!!」

向こうでは忍び装束と巫女服姿の琴葉と真白も、大きく実ったお腹を突き出して、二人仲良く民衆たちに犯され抜いており、桔梗もまた同様に情欲に荒ぶる民たちの肉棒にまみれて悦びの汁と声を上げていた。

「ふふふ、つい先ほどまで私の復活を阻止しようとしていた娘たちも、所詮は牝か……人



間の女など快感の前では、たわいもないものだな」

「んじゆるぶあつ!! おおううつつ! そ、そうですね! 私たちみんな玉門天さまの……妖魔さまの肉奴隷なんです!!!」

「あ、愛華の言うとおりだわ。私たちは神を信じて、禁欲なんか強いられて……そんなのデタラメよ。私たちだって、気持ちよくなりたいのっ! イキまくりたいのよっ! 玉門天さまは私たちをイカせまくってくれたわ。神なんかクズよ、最低よっ!!!」

二人の卑しき母娘が、仇敵だった男の言葉に進んで賛同し、目の前に群がる無数の肉棒にむしゃぶりついていく。

「ああんっ、もつとおつ! もつと桔梗のドロドロ破廉恥マンコに、あなたたちのぶつといチンポをぶち込んでやってくださいいいいんっつ!!!」

愛華と桔梗は我先に勃起ペニスを挿入してもらおうと、競うように股を開き、そして子供妖魔による子宮からの淫撃に淫らなアへ顔のまま潮を吹いては悶絶する。

「げははっつ、最低だぜこいつらっ!」

「自分で肉奴隷って納得してやがるっつ! こんな奴らに帝を任せてたなんて、そりゃこうなっちまうよなあっ、おいっ!」

完全に失墜する守護姫への信頼。しかし民衆たちが自分たちを嘲って、罵っているのがひどく心地よく、身体を駆け巡るマゾ快樂に情欲の炎が点火される。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



「当方M.D.R.E.I.希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集
しているようです
【小説：酒井仁 / 挿絵：こに子】

全国書店で
好評
発売中



「魔法の天使ルリエール!
地球の未来はルルにおまかせよっ☆」

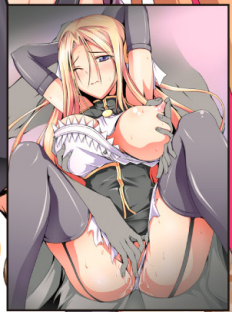
魔海少女ルリエール

【小説：羽沢向 / 挿絵：ピエール☆よしお】

借金お嬢クリス3
令嬢はいかにして42兆円を返済したか?
【小説：筑摩十幸 / 挿絵：了藤誠三】



全国書店で
好評
発売中



クリス、悪魔堕ち!?

「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ!」

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙獄字艶戦姫 / ノブナガ! ①～③
- 思春期なアダム ①～②
- 殉業!帝都少女探偵団 赤い眼帯を巻いて!

- 借金お嬢クリス ①～②
- プリンセスリバーシ! 文藝する美姫と魔姫
- BLANGEL 輪になりて語る悪者の夜

- 無敵の姫騎士がMMに目覚めたようです
- ピルクムメイデン ①～②
- 呪詛喰らひ師 [カースイーター]



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリエ
http://www.comic- Valkyrie.com/

cranberry
http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
http://www.mille-feuille.jp/

**モバイル二次元
ドリーム**
http://www.2d-dream.jp/



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!